【　　】

氏名	名古　忠行
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	法　　学
学位授与番号	博乙第３９１８号
学位授与の日付	平成１６年　３月２５日
学位授与の要件	（学位規則第４条第２項該当）
学位論文題目	イギリス社会民主主義の研究－ユートピアと福祉国家－
学位論文審査委員	主査・教授　荒木　　勝　教授　谷　　聖美 教授　小畑　隆資　教授　太田　仁樹

学位論文内容の要旨

学位論文の対象となったものは、2002年法律文化社から出版された名古忠行著『イギリス社会民主主義の研究』（本文324ページ、参考文献、索引含めて342ページ）である。

本書は、５部構成となっており、第１部は、社会民主連盟と対象とし、第２部は社会主義同盟を、第３部はフェビアン協会を、第４部は独立労働党を、第５部は労働党をそれぞれ対象としている。本書は、名古氏の前著『フェビアン協会の研究』（1987年）の成果の上に立ちつつ、さらにイギリスにおける社会民主主義の全体像を描くという試みである。

第１部の第１章、　社会民主連盟の思想と運動では以下の点が考察される。チャーティズム運動の終焉以来、沈滞していた社会主義・労働運動に１つの画期をもたらしたものは、マルクス主義に立つ社会民主連盟の設立（1884年）であったが、この章ではその運動の意味を簡潔に整理している。

第１部第２章では、この社会民主連盟創設のリーダーとなったH．M．ハインドマンの思想と行動の骨子が紹介されている。ハインドマンは、イギリスにおけるマルクス主義思想の紹介者であったが、彼自身の思想の核はトーリー的保守主義であり、彼における社会主義は、イギリス帝国の救済策としての意味をもつものでもあった。また彼の社会主義は、イギリスの労働者階級の福祉の充実を含むイギリス・コモンウェルスの発展を志向するナショナリズムを内包していた、とされる。

第２部第１章では、この社会民主連盟から脱退し、社会主義運動の新しい組織として社会主義同盟を組織したW．モリスやE．マルクス、E．アヴェリング等の思想と活動を概括している。その組織もまた内部でマルクス派とアナーキー派との対立を含むものであった。1889年以降、アナーキスト派が優勢になると、それ以外の社会主義者たちは、それぞれ別個の運動組織を立ち上げていくことになった。

第２部第２章では、W．モリスの社会主義思想が多面的に分析される。この章の叙述は本書の中でも、著者の熱気が感じられる部分である。モリスにたいしては、従来芸術家としてのモリスと社会主義者としてのモリスとをどのように統一的に理解するか、という論点、またモリスの社会主義思想の核心をブルジョワ的ボヘミアン的反抗に見出すか、マルクス主義に見出すか、という論点において論争がなされてきたが、著者は、芸術社会主義、ユートピア社会主義にモリスの思想の核を見ている。その論証として著者は、モリスの芸術論、労働本質論、フェローシップ論を分析し、モリスの思考を倫理的、宗教的質を有するものと規定している。

第 3 部第 1 章では、フェビアン協会の成立以降の活動を概括している。そこで著者はフェビアン協会の精神を、単なる漸進主義、国家干渉主義、中産階級の社会主義、客間の社会主義という点にではなく、道徳的理想主義、純正の立憲的社会主義、同時に多元的、経験的思考様式という点にみている。また同協会におけるウェッブ夫妻の活動の規模、後世へのおおきな影響（ナショナル・ミニマム論、労働党綱領）にも言及している。

第 3 部第 2 章では、フェビアン協会の活動家の 1 人でもあったアニー・ベザントの思想と行動を取り上げている。著者はベザントの様々な思想遍歴の跡―婦人解放論者、無心論者、社会主義者、植民地解放運動者、神秘主義者－を追跡したうえで、その中に一貫して流れるイギリスの理想主義的福音主義的伝統を指摘している。

第 3 部第 3 章では、フェビアン協会の指導者の 1 人、G．B．ショウの思想と行動をとりあげている。著者によれば、ショウの思想の核心は、ヴィクトリア社会の偽善の告発であり、その代替策としての平等社会の実現である。またその手段として社会主義の漸次的実現である。しかしながら大衆の統治能力に懐疑をいだいたショウは、平等社会の統治者としての超人思想にいきつく。そして晩年においては全体主義的国家論を展開するにいたる。

第 3 部第 4 章は、フェビアン協会に属しながら、独自の政治思想を展開させ、のちにフェビアン協会を去ったG．ウォーラスを取り上げている。筆者は、ウォーラスの思想の核心をアリストテレス、ベンタム、ラスキン等の思想に基づくヴィクトリア朝イギリス社会への批判にみており、したがってウォーラスの思想の核心には、自由主義とモラリズムの価値があった、とする。フェビアン協会を去ったウォーラスはニューリベラリズムの陣営に属して帝国主義的政策を批判しつつ、同時に個人を抑圧する大社会の到来を予告して、それへの対処を、社会心理学を含んだ新しい政治学構築のなかで果たそうとした。しかし彼が生涯を通じて追及したものは、フェビアン協会の目標「最高の道徳的可能性と一致する社会の再建」であった、とされる。

第 3 部第 5 章では、フェビアン協会に集う様々な思想家群を素描している。産業民主主義的教育を説いたW・クラーク、道徳的理想主義者のS・オリヴィア、明確な社会主義政党の必要性を説いたH・ブランド、フェビアン協会の忠実な書記E・R・ピーズをとりあげている。

第 3 部の第 6 章、第 7 書は、S．B．ウェッブ夫妻の思想と行動を詳細に跡付けている。筆者は、これまでのウェッブ夫妻像―国家社会主義者、官僚的テクノクラート的社会工学的改良主義者―という像を退け、彼らの思想の核心を、ヴィクトリア朝福音主義を根底とした、独自の社会有機体説にある、としている。その具体的政策がナショナル・ミニマム論である。第 7 章はこのナショナル・ミニマム論の内容、その形成とそれが労働党の福祉政策の核心になっていく経過を明らかにしている。本章はこれまでのウェッブ夫妻の思想研究のなかで十分に検討されていなかった彼らの政治論・国家論に焦点をあてている。この点が本書のなかでももっとも興味深い論述であろう。

第 4 部第 1 章では、自由主義の伝統から独立した労働運動の帰結として組織された独立労働党（1893 年結成）の組織が概観される。

第 4 部第 2 章では、この独立労働党の指導者ケア・ハーディーの思想と行動を取り上げている。厳しい奴隷的生活の中で生まれたケア・ハーディーの思想の核心は、ブルジョア階級への憎悪ではなく、むしろ自己犠牲を説くキリスト教的ヒューマニズム、兄弟的連帯

の思想であり、国家論としては国家＝人民という国家観であった。第１次大戦の渦中、ジンゴイズムの嵐のなかで孤立したハーディーは「刀折れ矢尽きて」倒れたが、ハーディーの道徳的権威は後世におおきな影響を与えたと筆者は述べている。

第５部第１章では、1900年の労働代表委員会結成、1906年の労働党の結成、1908年のＳ．ウェッブによる労働党規約、綱領の策定とそれによる労働党の国民政党への転化、1924年の第１次労働党内閣（マクドナルド首班）、1929年労働党の第１党としての躍進、第２次労働党内閣（マクドナルド）、1931年マクドナルドによる挙国一致内閣の成立までの過程を概観している。

第５部第２章では、1931年自らの支持基盤であった労働陣営に背をむけて挙国一致内閣を組織したＪ．Ｒ．マクドナルドの思想と行動を追跡している。筆者によれば、マクドナルドは出自としては生粋の労働者階級出であるが、彼固有の社会論、国家論の形成によって、自らの行動を律していった、とされる、その思想の核心は、政治的有機体としての国家論、社会全体の機関としての国家像である。こうした思想の論理的実践的帰結こそ彼の挙国一致内閣の組閣であった、とされる。

以上が、1880年代から１９３０年代までのイギリスの社会民主主義の思想と運動として名古氏が考察した対象である。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2004年２月13日、学内審査委員４名によって行われた。審査の結果は以下の通りである。

本学位論文は、1880年代から1930年代までのイギリスにおける社会民主主義の思想と運動を研究対象としたものである。

本学位論文は、名古氏のこれまでのイギリス労働運動史研究の集大成ともいうべきものであり、前著の『フェビアン協会の研究』（1987年）の研究を踏まえつつも、それらの研究では検討されなかった対象を取り込み、さらにW．モリスやウェッブ夫妻、Ｊ．Ｒ．マクドナルドの思想の政治学的分析を踏まえることによって、当該研究領域の発展に大きく寄与する内容となっている。

本学位論文の対象とするイギリス社会民主主義に対しては、これまで本格的研究としては、戦前の河合栄次郎による研究を別とすれば、総括的な研究として関嘉彦氏の『イギリス労働党史』（1969年）、安川悦子氏の『イギリス労働運動と社会主義』（1982年）が挙げられるが、前者は、この研究の対象としている時期の考察としては、いまだ一般的でありまた政治史的であった。また後者の安川氏の研究は、本格的な労働運動史研究であったが、分析方法が民衆運動史的方法であり、また基本的にマルクス主義的歴史認識に支えられたものであったために、これらの運動の内部に生じた非マルクス主義的思考の意味について十分な掘り下げを果たすことができなかったと思われる。それらの研究にたいして本学位論文は、イギリスの社会民主主義の形成と発展の時期に限定した専門的研究であり、また研究視角として、これらの運動を担った思想家の国家論、政治論の分析に踏み込むことによって、イギリス社会民主主義の今日的意味を引き出すことに成功している、ということができよう。

また名古氏は、本論文の執筆にあたっては、オックスフォード大学ナフィールドカレッジに留学されて、手書き草稿を含んだフェビアン協会関連の原典資料を自ら収集されている。したがって資料的価値の点からも本学位論文は今後の研究におおいに貢献するであろう。

以上の点が本学位論文の基本的評価であるが、審査の中で以下のような問題点の指摘もあった。イギリス社会民主主義におけるマルクス主義思想の影響力の大きさについて、より正確な測定が必要であること。たとえばマルクス主義の影響下にあったとされるW．モリスの評価についてもこれまでの研究史への積極的な反証を具体的に展開すべきであった。イギリス労働運動史上避けて通ることのできないテーマであり、今日でもホブスボームの研究等によって重要な問題が提起されている労働貴族論、非宗教的要素への対論も必要であろうし、またフェビアン主義に通底する帝国主義的傾向の分析とその評価も、言及すべきテーマであること。救貧行政の転換の過程とそれに関わるフェビアン協会の関与の実態にも触れるべきであった。さらに本学位論文のもっとも核心的部分である、それぞれの思想家の政治・国家論の分析にやや不明瞭な部分が残っていること。とくにウェッブ夫妻とマクドナルドの国家論として紹介されている、社会有機体論・政治有機体論については、国家論としての更なる精緻な分析が要請される。しかしながらこれらの問題点の究明は、今後の研究に期待する諸点であり、この研究の成果を損なうものではないことはいうまでもないことである。

審査委員会は、以上により、本学位論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意に達した。